

石川直樹展「島は、山。」に寄せて

鹿児島国際大教授 ジェフリー・S・アイリッシュ

トークを聞く機会を得た。写真や地図、テント、お気に入りの蔵書などを通して、石川さんのことを知る展示である。

最初に、悪石島のボゼや下甑島のトシドンなど、15年ほど前から石川さんが鹿児島の島々で撮りためてきた、祭祀の写真と記録が、プロセスを追うように展示してある。

石川さんは現場に早めに入り、「ケ（日常）」から「ハレ（非日常）」へと変化していく生活空間と、人と神との関係、人が神に変身する瞬間などを探っているそうだ。

展示してある彼の写真を見ながら、島の日常や非日常の写真を撮る時、彼は相手の領域のすぐ近くまでは行って

山の空気に触れたいとの、文化的な刺激を求めて、時々霧島アートの森に足を延ばしている。先日、開催中の石川直樹展「島は、山。」を訪れ、本人のトークを聞く機会を得た。写真や地図、テント、お気に入りの蔵書などを通して、石川さんのことを知る展示である。

も、決してその中までは入り込んでいかないように感じた。「生活の大切なものを撮らせていただいている」という石川さんの姿勢は、一線を引いているようで、私には新鮮だった。私はどんな時もいたりの尊敬の念のようなものを

一期一会の「今」大切に



鹿児島や沖縄の島々で撮影した写真が並ぶ、石川直樹「島は山。」展 三漣水町の霧島アートの森

JEFFREY S IRISH氏 1960年
米国カリフォルニア生まれ。鹿
児島国際大学教授。98年に旧川
辺町に移り住み、土喰（つちく
れ）集落の小組合長を2回務め
た。日々の生活や田舎暮らしな
どを本紙に9年間連載。2010年
から鹿児島国際大学で地域創生、
まちづくりなどについて教壇に立つ。
10年に南日本文化賞、
16年南日本出版文化賞。



カメラを向けるときにズームはせず、対象となるものに自ら近づく。「自分の足がズームになる」と石川さんは言う。そこで流れる時間や記録に自分の存在のアピールではなく、その場にいることによって彼が立たせている波もない。

スマホやデジカメの時代に
あえてフィルムカメラを使
い、ほどんど横長の写真を撮
るところも興味深い。写真が
横に長いことで、その端っこ
に思いもよらなかつたものが
写ることもあるそうだ。

身も石川直樹との出会いは、
彼が書いた「最後の冒険家」
という素晴らしい本を通して
だつた。写真の撮り方同様、
文章からも近過ぎず遠過ぎ
ず、一定の距離を保ちながら
観察する彼の姿勢を感じた。
島は山にも見える。石川さ

島の生活、または山を研究しているというよりも、彼は一つ一つの場所を訪れてはお辞儀をして、その場所や時間に触れて、再びお辞儀をして帰る。写真を見てみると、そんな情景が目に浮かんでくる。

たばかりの写真を参考にする
ことはできない。今を見る、
今を撮る、「今」を常に大切
にする一期一会の世界。「体
が反応した時に撮る」と石川
さんは言つ。

「山」として見て、感動したことがある。

■ 霧島アートの森で来月1日まで一般800円、高大生600円、小中生400円。石川さんと東京芸術大学の伊藤俊治教授によるトークイベントが、11月23日午後2時半から開催(当日午前11時から整理券配布)。